

からなくて、未直はしゃくりあげた。

「お、れ、ほんとにおかしいのかなあ？ 明義さん、ごめんね？ 頭おかしい子につきあわされて、め、めーわく……っ」

『おまえの迷惑なんぞいまさらだ。いいか、そのまま電話切るなよ』

言いながら明義が走ってる気配がする。えずくくらいに泣きながら、もう遠慮もなにもできなくて未直はうなずいた。

「で、でも、く、車運転するときに、電話しちゃいけないだよっ」

『心配すんな、タクシー拾った。……すみません、246の……ええ、そこに……』

途中からは通話口をふさいだようなくぐもった声になった。本気で来てくれるのかと驚いた未直が硬直していると、『もう少しだけ待っている』と言った明義が、シートに腰を深く下ろした気配がする。

（嬉しい）

もうぐちゃぐちゃになった感情のおかげで、シンプルなことしか考えられない未直は、こちらに向かっているだろう男に会えるだけでいいと思えた。小さく涙をすすり、明義がなにか言うのを待っていると、彼にしてはめずらしい、ためらいがちの声がする。

『あんな、おまえな』

「う、うん？」

『毎日、最後のメールに書いてくるアレ。本気か』

前振りまえふりもなにもない、直球の問いかけだった。どきくと胸を騒がせつつ、未直は思わずなずいたあと、小さな、けれど真摯な声で答える。

「うん。……本気」

最初に出会ってから、まだ一ヶ月も経っていない。

けれど、出会ってからずっと、未直は好きだと言いつづけた。顔を見られるうちは彼の目を見て、メールのやりとりをはじめてからは末尾で必ず。

『本気って言われてもな。おかしいだろ。ろくに話したこともねえだろうが』

「それはそうなんだけど」

直しかに顔を見て話したのは、出会った日から数回、そしてメールをやりとりするようになって

からは、あのファミレスで一度きり。指摘されれば否定できず口ごもると、明義はまるで説得するかのように言葉を綴る。

『助けられたから、舞いあがってんじゃないのか？ 吊り橋効果って知ってるかおまえ』

危険な目に遭った際の胸の高ぶりを、恋のときめきと勘違いしてしまう。そういう心理状態について明義は説明してくれたけれど、未直は「そんなんじゃないよ」と言った。

「だってふつうに、助けてくれたひと好きになるって、あるじゃないか」

『まあ、そうだが。けどあんなん、忘れちゃえばいい話だったのに』

「忘れないよ。あんなの、忘れらんない」

たしかに一目惚れみたいなものだと思う。あつという間に恋をした未直を、のぼせているだけだと決めつけていた明義は、ここにきてやっと、未直の本気を疑えなくなったらしい。

そして本気だと知れば、明義は無視したり、ごまかしたりしないのだと未直は知っている。

『おまえいつたい、どこがそんなにいいんだ、俺の』

困惑したように問われて未直が言葉に詰まったのは、好きな理由がわからないからではない。多すぎるからだ。だから未直は、こう答える。

「どこって言えない。いまは全部好き」

『全部って、なんだそりゃ……おまえ、俺のなに知ってんだよ』

「なんにも、知らない。でも好きだもん」

未直の真摯で素直な声に、どうしてか明義は困ったような声を発した。

『あのな。おまえよか十七もオッサンだぞ。べつに愛想ねえし、とくに金ねえぞ』

「オッサンじゃないよ。年上かもしれないけど、明義さんかっこいいよっ」

きっぱりと言うと、電話の向こうでは沈黙されてしまったが、未直は本気なんだと訴える。

「最初に会ったとき、助けてくれたし、話聞いてくれたし。ちよつと怖かったけど、かっこよかったよ。それにお金とか、べつにどうでもいいもん」

はじめて、きちんと未直の言葉を聞いてくれたのだと思った。それだけで嬉しかった。軽蔑

されてもおかしくないのに、そんなのは個性だと言いきってくれた。ぐらぐらする足下あしもとに、ちゃんと大地があるのだと教えてくれた。

『話ったって、……いいか、たとえば。たとえばだ。おまえの望むとおりにしたところで、きつとあわねえぞ』

タクシーのなかであるせいか、いつもストレートな明義の歯切れが少し悪い。たぶんこんな話をするのも、思いつめた未直がなにかしでかさないかと気にかけていてくれるせいなのだ。わかっていて、それでもきちんと言をしてくれるのが嬉しくて、未直は言った。

「毎日メールの返事くれるじゃん。やさしいの知ってる。話は、いまちゃんとできてるよ」

『だから、その程度だろうが。やさしいなんてのも、勘違いじゃねえのか？』

「違うよ。おれいつも、明義さんがいるだけで嬉しいもん。ほんとに、本気だから」

恋に恋をしているのだらうと、明義には何度も言われた。のぼせているだけなのだらうと決めつけられて哀しくて、それでも未直はめげなかった。自分でも不思議なくらいに。

「あのね。おれね。現代っ子で打たれ弱いんだよ」

叱られるのにも慣れていないし、拒絶されるのはもつと怖い。ぬるい甘い関係に浸ひたっていただけの、ずるい子どもだという自覚はある。

「でも、どんなにやめろって言われても、これだけはやめらんない」

家族が口をきいてくれないだけで、死にたくなるくらい孤独を覚えてしまうのに、どうして

か明義には怒られてもすげなくされても、あきらめようという気はしなかった。

たとえ彼にはこれっぽっちも応える気がないとしても、ちゃんと未直の声が届いている事実だけで、泣けてくる。明義がここにいるんだと知るだけで嬉しくなる。そんな気持ちが好きだと言わないで、どうすればいいのかわからないのだと、拙い言葉をつくして恋心を訴えた。

「おれ、明義さんのこと考えると胸から指のさきまで、じんじん痛くなる。ものすごく痛い。すごくつらいけど、嬉しいんだ。おれ、こんなに嬉しいって思ったことなんかないもん」

メール一通に一喜一憂^{いっきいちゆう}して、声を聴いただけで眩暈がして、息苦しくてせつないのに、その痛さを手放したくなくなる。心臓の位置がどこにあるのか思い知らされるように胸が高鳴る。

平穩に、イイ子にしながら生きてきた未直は、冒険らしい冒険をしたことがない。危ないこともしたことがない。けれど人生ではじめて怖い思いをしたあの日の混乱と恐怖は知っている。「だから、吊り橋効果なんかじゃないよ。あの変なおじさんに絡まれたとき、怖くて心臓ばくばくしたけど、明義さんと一緒にいるときのとぜんぜん違う。身体から、なんか溢れそうになるんだ。なんだかわかんないけど、うわあつてなる」

刺すようなあの甘い痛さは明義しかくれない。未成熟な身体の奥が不思議に妖しく^{あや}ざわめくような動揺は、ほかの誰にも与えられないのだ。それだけは信じてくれと未直は繰り返した「あ、明義さんがおれのこと、うざいしきらいって、言うなら、しょうがない。でも——」

はじめて好きになったひとに、否定されることだけはつらいから、彼の懐^{ふところ}の深さにつけこん

でいるのはわかっていて、未直は言った。

「でも……そうじゃないなら、もうちょっと、こういうの許してくれない、ですか」

好きでいると告げる自分の言葉を、嘘や勘違いだとかくって片づけないでほしい。

もう少し、未直があきらめをつけられるまでの間でいいから、やさしい明義に甘えていた。

泣きそうなのをこらえて、すぎるようにそう告げると、電話の向こうで派手なため息が聞こえてびくりとする。

『おい、未直』

「……はい」

やっぱりだめだと言われるのだろうか。びくびくしながら未直がかしこまった声を発すると、『あとは顔見て話す』と電話が切れた。あ、と思っていると背後から車の音がして、はっと振り向くと明義がああ無愛想な顔で近づいてくる。

「とにかく残りの話は、あとだ。乗れ。つたぐびしよ濡れじゃねえかよ」

「ど、どこいくの」

答えないまま、腕を掴んだ明義は未直をタクシーに放りこみ「新宿駅に戻ってくれ」と運転手に告げた。濡れ鼠^{ねずみ}の真つ赤な目をした高校生と、いかにも剣呑な気配の男の取り合わせに運転手はいやそうな顔をしたが、明義がひと睨みすると逆らうことはなく、無表情のまま目的地